

〈論文〉

沖縄の出土銭

— 11～16世紀を中心に —

三宅俊彦

要約

11～16世紀における沖縄の銭貨流通について、出土銭から検討した。まず、宮城弘樹の研究を参照しつつ、出土銭の特徴を抽出した。その結果、①大銭が出土する、②明銭が高い割合を示す、③無文銭が現れるなどの特徴が明らかとなった。これを受け東ユーラシアの銭貨流通との関連を検討するため、それぞれ個別に分析を加えた。そして、これらの特徴は中国および日本本土の銭貨流通の影響を受けながら形成されたものと考えた。その上で、筆者が提唱する東ユーラシアにおける銭貨流通モデルに、沖縄の出土銭を位置づける試みを行った。銭貨流通モデルは、中国を中心として小平銭と大銭が流通する「地域A(中心)ー地域B(周辺)ー地域C(辺縁)」と、日本が中心の小平銭のみが流通する「地域aー地域bー地域c」からなる。検討の結果、沖縄本島は地域Bと地域bに属し、離島は地域Cおよび地域c、台湾は地域Cにそれぞれ位置づけられると結論した。

キーワード

沖縄 出土銭 11～16世紀 銭貨流通 東ユーラシア

はじめに

東ユーラシア^{註1)}では中国に起源を持つ円形方孔の銭貨が、貨幣として長期にわたり流通してきた。特に北宋で鑄造された大量の銅銭は、南宋以降、元・明の時期に広く東ユーラシアへと流出し、各地で通貨として貨幣経済の根幹を担った。

筆者は10～15世紀の東ユーラシアにおける銭貨流通の様相を、考古資料としての出土銭をもとに復元を試みた。その結果、中国と日本・ベトナムおよびインドネシアでは中国銭が流通している状況は同じでも、「渡来銭」として受容した地域では「銅の小平銭(一文銭のこと)」のみが選択され、独自の銭貨流通圏が構築されていたことが分かった。また同時に日本・ベトナム・インドネシアでは、それぞれ個別に中国銭を受容しながら、「銅の小平銭のみで貨幣経済を営む」という共通したメカニズムによって銭貨流通システムを構築したことが明らかとなった(三宅2018)。

こうした東ユーラシア各地の銭貨流通は、中国からもたらされた銭貨が基盤となっていることは明らか

みやけ としひこ：淑徳大学 人文学部 教授

かであり、その供給を担う貿易活動がいかに活発であったかを物語っている。中世の東ユーラシアにおける海上交易活動が、これらの地域を結びつけていたのであり、出土銭貨からもそのことをうかがい知ることができよう。そして、琉球がこうした地域間交易の担い手として重要な役割を果たしたことは論をまたない。

本論では、グスク時代が開始される11世紀ころから、琉球が環シナ海交易を盛んに行っていた15～16世紀を中心に、沖縄から出土する銭貨について分析を加える。これにより琉球での銭貨使用の実態が明らかになると期待される。また同時に、台湾を含む周辺地域との比較を通して、沖縄における銭貨の流通状況を東ユーラシアの中に位置づけてみたい。併せて筆者が提唱している銭貨流通モデルの有効性についても検討を試みる。

1. 沖縄における出土銭の概要

1) 11世紀以前

沖縄における出土銭貨については、近年では宮城弘樹が集成を行い、その様相を詳細に分析した論文がある。当該論文で宮城は、研究史をまとめると同時に出土銭を集成し、時期区分を試みている(宮城2008b)。本論では宮城論文の時期区分に従い、以下に沖縄における出土銭の様相を概観しておきたい^{註2)}。

沖縄で出土する中国貨幣で、もっとも早い時期のものは戦国時代の明刀銭である。明刀銭は一般に中国でも北方で流通していたものであり、当時の中国大陸との関係はなお判然としてはいないのが現状である。宮城は明刀銭をⅠ期に位置づけている。

宮城の時期区分でⅡ期に相当するものは、前漢から隋まで鑄造された五銖銭であり、貝塚時代後期前半の遺跡から出土事例が多いと指摘する。

宮城Ⅲ期は唐の開元通寶を指標としており、沖縄諸島の貝塚時代後期後半期、および先島諸島の無土器時代の遺跡から出土する。この時期の銭貨の出土事例は多く、宮城は南西諸島出土の開元通寶について、「出土枚数が、本州の同時代遺跡に比し多い」ことを指摘しており、注目される。このことは当時の南西諸島が中国と直接交渉を持っていたことを示唆しているからである。

また当時の社会状況は物々交換であり貨幣需要は想定されていなかったが、高宮廣衛は開元通寶が多数発見される状況を積極的に評価し、これまで考えてきた「貨幣価値以外の用途」ではなく「開元通寶本来の貨幣価値を認めるべきではなかろうか」と説く。高宮はさらに当時の沖縄は「国際通貨としての開元通寶の流通圏内、もっと具体的にいえばその縁辺部に位置していた」とする。しかしその「見返りの産物」は不明であり、日本から唐への貢納品や補給物資などの可能性を示唆するに止めている(高宮1995)。

2

この琉球列島内の産物に関して、木下尚子はヤコウガイを想定している。木下は遺跡から発見されるヤコウガイからその生産地や時期を割り出し、開元通寶の発見例と比較し「琉球列島内の開元通寶の多くは、ヤコウガイ貝殻の対価の一部として中国から直接もたらされた可能性が高い」と述べる(木下2000a)。木下は別稿でも類似の論を展開している(木下2000b)。

小田静夫も同様に唐がヤコウガイを求めて中・南琉球に来航したとの見解を示した上で、開元通寶を用いて「鉄器とその材料の鉄塊」を購入したとし、同時に開元通寶を扱う商人の存在も推測する(小田2007)。

上記のような開元通寶を貨幣として用いた中国との交易を想定する見解がある一方、「貨幣」として

の使用を疑問視する見方も存在する。山里純一は、当時の東アジアでは国際貿易において銭貨が通貨として使用された可能性は低いとする栄原永遠男の指摘を踏まえ、通貨としての使用には慎重な姿勢をとる。山里は南島出土の開元通寶は「その大半は遣唐使が帰国に際し南島に寄港ないしは漂着した際に島民に与えたものであろう」とし、その島民はその地域の「指導者」ないしは「実力者」であり、開元通寶を権威づけに所有していた可能性を推測している(山里1999)。小畑弘己も同様の観点から、たとえばヤコウガイ交易によって中国商人から開元通寶がもたらされたとしても、ほかの銭貨と伴わない点を考えると「受容側では宝物・祭器的な意味合いで受け取った可能性が高い」としている(小畑2003)。

筆者はこれら沖縄から出土する開元通寶に対して、独自の見解を持ちあわせてはいない。しかし、宮城弘樹の指摘するように、本州よりも多くの出土例がある点を考慮すると本州からの影響は考えにくく、やはり中国からの直接もたらされたものと考えべきであろう。

しかし「貨幣」として機能していたかという点では慎重にならざるを得ない。確かに本州よりも出土事例は多いが宮城の集成表を見る限り、先島諸島を含め、また検討を要する遺跡も合わせても111枚しか発見されておらず、もっとも多く発見された事例でも33枚である(宮城2008b)。交易に用いるための貨幣として評価するには少なすぎるであろう。

本論後半で検討するが、台湾などでも開元通寶をはじめとする中国銭貨の出土は見られるが装飾品としての使用が想定されており(臧・劉2001)、貨幣として機能したとは考えにくい。またサハリンなどでは出土銭貨の多くは装飾品として用いられており、中国の縁辺部では経済外的な使用が普遍的に見られる(三宅2013)。このことから、銭貨である点にこだわりことさら「貨幣」としての機能を強調する必要はなからう。長濱健起は当時の経済体系を「狩猟採集経済」とし、銭貨(貨幣)を中心とした「貨幣経済」とは区別してとらえている。その上で長濱は「当時の中国を中心とする貨幣経済圏が沖縄やその周辺地域にまで影響を及ぼしていた」と考える(長濱2019)。首肯できる見解であろう。

2) 11～16世紀

宮城の区分でⅣ期に相当するのは宋銭が主体となる時期であり、11～12世紀のグスク時代初期から本格的なグスク築城の13～14世紀前半の時期である。宮城によれば、この時期の遺跡はその後隆盛を迎えるⅤ期の事例と重なる遺跡が多いことから、Ⅳ期の事例を抽出することは困難とのことである。宮城は暫定的に明銭の出土しない、唐～元代までの銭貨で構成される6遺跡をⅣ期の事例として紹介している。銭貨の枚数は集計表によると23枚と少ない(宮城2008b)。

続く宮城Ⅴ期が、沖縄でもっとも多く銭貨が発見されている時期である。Ⅴ期は14世紀後半～16世紀に相当し、沖縄島の按司から山北、中山、山南の王が現れ、15世紀前半に中山が統一して琉球王国となり、16世紀には奄美・先島などへと勢力を拡大する時期に当たる。

宮城はこの時期の事例112遺跡を抽出した。その中から寛永通寶、清朝銭、無紋銭および判読不明を取り除いた3,935枚について、その銭種構成を報告している。それによれば中国の各王朝の銭貨が99%を占め、ほかにベトナム、朝鮮(李朝)、琉球の銭貨が含まれていた。中国銭では北宋銭と明銭が主体となっており、北宋銭が44.9%、明銭が42.8%となっている。

注目されるのは明銭が42.8%と多くを占める点である。日本国内の一括出土銭を集成した鈴木公雄の研究によれば、日本本土の出土銭貨では北宋銭が77%であり、明銭は8.7%であった(鈴木1999)^{註3)}。この点から宮城は「明銭の占有率の高さは琉球の銭貨流通の特質」として強調している。

また宮城は、このⅤ期の出土銭貨の特徴として大銭が多く出土する点をあげている。これは日本本土では「銅の小平銭」のみを選択的に流通させていた点と大きく異なる。宮城が沖縄考古学会の発表にて

配布した資料^{註4)}によれば、沖縄で発見された明代までの中国・ベトナム・朝鮮・琉球の銭貨は3,932枚あり、その内201枚が大銭であった(宮城2008a)。大銭の占める割合は5.1%となるため、大銭が一定量流通していたことが分かる。

また宮城によれば、V期は無文銭の有無によって細分できる可能性があるという。宮城は、無文銭を伴わないV期前半に限定できる事例の年代について、共伴する陶磁器よりおおむね15世紀前半としている。さらに無文銭が流入した時期について、現段階の資料では「推察の域を脱し得ない」と断りながら、おおよそ15世紀後半段階と考えている。そして無文銭は日本から輸入されたものとしている。

無文銭は日本本土で多く出土し、九州では一括出土銭に含まれている事例も発見されている。たとえば宮崎県五ヶ瀬町坂本城跡一括出土銭では4,917枚の無文銭が発見されている(櫻木・他2013)ほか、堺環濠都市遺跡からは無文銭の鋳型も発見されており(嶋谷2001)、無文銭が日本本土で作られていたことは確実である。一方、ベトナムなどで鋳造される私鑄銭は基本的に銘文があり無文ではない。たとえばベトナム北部で収集された一括出土銭3号資料は、判読不明なものも多かったが、すべて何らかの銭銘が施されていた(三宅2008)。つまり日本本土で作られた無文銭が琉球へ持ち込まれたとする宮城の説は蓋然性が高いと言えよう。この点については、次章で再度検討したい。

3) 16世紀以降

宮城による区分の最後はVI期であり、1609年の薩摩による武力侵攻以降に相当する。この時期の出土銭貨は無文銭と寛永通寶が主体となっている。無文銭は「鳩目銭」と呼ばれ、この時期に琉球王府の定める公鑄銭として流通した。宮城によれば無文銭は15世紀から16世紀頃に登場し、時代が下るに従い外径や重量が減じ、品位が低下していくという。それに従い無文銭と寛永通寶の交換レートも下落し、16世紀半ば頃には1:10(銭1文に対し無文銭10)だったものが18世紀半ば頃には1:50になっている。

こうした無文銭は市場でも忌避され、実際には寛永通寶が流通していたと言われる(東恩納1979)。また興味深いことは、中国に対して、琉球が独立しており日本に属していないことを説明するため、中国の冊封使が来た時は鳩目銭(無文銭)を用い、帰国すると元に戻る(寛永通寶を使用)という文献が見られることである。この点を宮城は、無文銭の流通は「国の体面を保つ装置」であり、低品位の無文銭が公鑄銭として流布し続けた理由の一つとして考えている。

無文銭の沖縄への流入およびその流通に関しては、日本本土およびベトナムなどの考古資料から比較検討する必要がある。次章にて検討したい。

2. 出土銭の特徴

4

1) 大銭

第1章では宮城弘樹の集成と研究をもとに、沖縄の出土銭の状況を概観した。本章では宋銭および明銭がもたらされ流通した時期を中心に、その特徴を分析してみたい。宮城の時期区分ではIV期およびV期、年代としてはおおよそ11~16世紀となろう。

中国銭がいわゆる「渡来銭」として持ち込まれたという点においては、日本本土と沖縄は同様の状況であった。しかし、出土銭貨において、日本本土との比較でいちばん大きく異なるのは、大銭の存在であろう。まずこの大銭について概観しておこう。

前述のごとく、宮城の配布資料によれば、明代までの銭貨3,932枚の内201枚が大銭であり、5.1%

を占める。内訳は北宋のものが133枚、南宋は44枚、元が2枚、明が22枚である(宮城2008a)。この出現率は、日本国内では突出している。鈴木公雄による集成では、一括出土銭に含まれる大銭の割合は約0.01%であり、ほとんど含まれていない(鈴木1999)。日本本土で大銭が多く出土しているのは九州の博多であり、小畑弘己によれば出土銭全体に占める割合は0.78%であるという(小畑1997)^{註5)}。これらに比べると、沖縄で発見される大銭の比率がきわめて高いことは明らかである。このことから沖縄では、「銅の小平銭のみ」が流通した日本本土とは流通銭貨の種類が異なっていたことが分かる。この点において沖縄と日本本土とは区別する必要がある。

では、大銭を铸造し流通させていた中国との比較ではどうだろうか。中国の一括出土銭の報告で、大銭の割合を記しているものは大変少ないが、いくつかの事例をみてみたい。浙江省杭州市の豊楽橋北100mにて約130kgの銭貨が出土した南宋・建炎通寶(1127年初鑄)を最新銭とする事例では、12,578枚を整理したところ2,002枚が大銭であり、比率では15.9%であった(陳1988)。また河北省完県の安陽小学にて約100kgの銭貨が出土した金・大定通寶(1178年初鑄)を最新銭とする事例では、14,681枚を整理したところ2,059枚が大銭であり、比率は14.0%であった(馬1994)。これら中国の事例をみると、大銭は銭貨の流通量のうち14~16%程度であったと推測される。その割合と比べると、沖縄出土の大銭お比率は10ポイントほど低い。

以上をまとめると、沖縄から出土する大銭の比率は日本本土と比べると高いが、中国と比べると低い、ということになる。

沖縄でも大銭が一定量流通していたことを考えると、中国の銭貨流通が反映されているものと推測できよう。宮城弘樹は、最新の論考で沖縄の大銭について「時代や地域によって」と条件つきながら、「(中国の)内部貨幣としての銭貨流通システムに取り込まれていた可能性は決して低くない」との見解を示している(宮城2017)。首肯できる見解である。この点については次章でさらに検討したい。

2) 明銭

沖縄の出土銭の特徴として次に挙げられるのは明銭の多さである。宮城弘樹の集成では、沖縄でもっとも多く出土するのは洪武通寶の1,089枚であり、ついで永楽通寶569枚となる(宮城2008a)。この明銭2種類が突出して多いことが特徴であろう。

特に洪武通寶の多さは際立っており、2位に倍近い枚数差で1位である。日本本土での一括出土銭では洪武通寶は11位であり(鈴木1999)、比率の高いことが指摘されている博多でも順位は6位である(小畑・西山2007)。明では建国当初の洪武帝のときに銅銭を大量に発行しており、中国の一括出土銭でも洪武通寶が高い比率を示すものが複数発見されている(三宅2005)。これらは中国との交易を通じて、沖縄にもたらされたものと言えよう。

永楽通寶も、沖縄では洪武通寶に次ぐ2位の出現率であり、日本本土の6位(鈴木1999)、博多の9位(小畑・西山2007)よりも高い比率を示す。日本本土においては、永楽通寶は京都を中心とする畿内では嫌われ、関東や九州で多く発見される傾向が指摘されており(鈴木1999)、また関東では永楽通寶を基準通貨とする動きも見られたという(中島1992、永原1997)。沖縄の永楽通寶は、中国からもたらされたものであるが、貨幣として流通する中では日本本土の影響を受けていたと考えられる。なぜならば中国においては一括出土銭に永楽通寶が含まれる事例はほとんどなく(三宅2007)、出土事例からみれば中国国内では永楽通寶はほとんど流通していなかったと考えられるからである。永楽通寶が多く出土するという点において、沖縄は日本本土の銭貨流通との関係を視野に入れる必要がある。

3) 無文銭

本論において分析の中心となる宮城Ⅳ期およびⅤ期において、Ⅴ期を画する銭貨として注目されるのは無文銭である。宮城弘樹は遺跡から共伴する陶磁器を分析し、類例の少なさから推察の域を出ないとしながらも、おおよそ15世紀後半段階に無文銭の流入があったと考えている(宮城2008b)。そして宮城は文献および考古資料の検討から、これら無文銭は日本本土からもたらされたと考えている。

無文銭とは表面に銘文がなく、また周囲の輪や中央の方孔に見られる郭などもない銭貨で、薄い円形の銅板に中央に方形の孔があいただけのものである。これらは正式に発行された公鑄銭ではなく、私に鑄造された私鑄銭であり、低位品位の銭貨といえる。堺環濠都市遺跡では16世紀中ごろから後半と考えられる無文銭の鑄型が発見されており、日本では無文銭を鑄造したことが分かっている(嶋谷2001)。出土事例は東北北部や九州で多く、また沖縄でも多数発見されていることから、鈴木公雄は粗悪な銭貨が銭貨流通圏の周辺部にしだいに集積されていったと考えている(鈴木1999)。同様の見解は文献史からもなされており、東恩納寛惇は「本土から駆逐された鏝銭が流込んで」きたため、沖縄で無文銭が使われるようになったとしている(東恩納1979)。

上記のように、無文銭のルーツが日本本土にあるとする研究者は多い。筆者も同様に考えている。理由としてはまず、鑄型が発見されていることから無文銭は日本国内で作られたことが確実であり、九州において一括出土銭から発見されるなど、銭貨として流通していたことが確認できる点があげられる。

さらに低位品位の私鑄銭を鑄造する場合でも、東アジアの多くの地域では必ず銘文が伴う点を指摘しておきたい。たとえばベトナム北部の一括出土銭である3号資料の事例では、小型の薄い私鑄銭で構成されていたが、判読不明のものも含め、必ず銘文が施されていた(三宅2008)。同じく5号資料でも小型の私鑄銭が相当量含まれていたが、すべて北宋など中国の銭貨銘を使用していた(櫻木2013)。さらに阿部百里子はベトナムでの私鑄銭に関して検討を加え、「元」字のみを篆書とする一連のグループが存在することを明らかにしたが、これらも無文ではない(阿部2013)。またインドネシアのバリ島にある寺院から出土した賽銭には、漢字を模したと思われる、正確には判読不能の文字が配された、現地鑄造の銭貨が存在する(三宅2014)。おそらく漢字を理解しない現地の人々が中国銭を真似て作ったものであろう。

これらの事例から、日本以外の東ユーラシアでは、たとえ漢字が理解できなくても、銭貨には必ず銘文が必要であることが分かる。むしろ無文の銭貨を鑄造するのは日本特有の現象であり、その点を考えると沖縄にもたらされた無文銭のルーツは日本本土である蓋然性が高い。

なお、沖縄においては薩摩が侵攻した17世紀以降(宮城Ⅵ期に相当)、無文銭が寛永通寶とともに大量に流通し、独自の銭貨流通圏を形成する。宮城は、寛永通寶を使用しているのを中国人にはそれ見せず、尋ねられたら鳩目銭(無文銭)を用いていると答えさせる申し渡しを(琉球)王府が出していることから、「銭も独自のものをを用いることで、国家としての体面を保とうとしている状況」にあるとし、低位品位の無文銭を流通させることがむしろ「国の体面を保つ装置」として機能したとする(宮城2008b)。このように近世の琉球王府が自ら積極的に流通を促した無文銭であるが、そのきっかけは15世紀後半に日本本土で鑄造された無文銭の流入にさかのぼることができよう。

3. 銭貨流通の検討

1) 東ユーラシアにおける銭貨流通のモデル化

第2章では11~16世紀ころの沖縄で流通していた銭貨について、その特徴を抽出して検討した。そ

の結果、①大銭が出土する、②明銭が高い割合を示す、③無文銭が現れる、などの特徴が明らかとなった。このうち①の大銭は中国、②の明銭は中国と日本本土、③の無文銭は日本本土と、それぞれ近接する地域からの影響関係の中で現れた特徴であり、近接地域を通じて東ユーラシアの大きな銭貨の動きに連動している現象ととらえることができよう。この第3章では沖縄の出土銭を、東ユーラシアにおける銭貨の動きの中に位置づけてみたい。

筆者は近年、東ユーラシアにおける銭貨流通のモデル化を試みている(三宅2018)。沖縄の出土銭を検討する前に、ここではまず銭貨流通モデルの構造について概観しておきたい(図1、表1)。

東ユーラシアにおける銭貨流通の中心は中国本土である。中国では宋代、特に北宋の時期に銭貨を大量に発行し、それが遼・金・西夏といった北方の異民族王朝でも流通していた。そしてこの周辺にその影響を強く受ける地域(モンゴルや沿海州など)があり、中国本土との決済手段として銭貨を用いていた。さらにその辺縁に「貨幣」としての認識を減じながら、装飾品などとして銭貨を用いる地域(サハリンなど)が存在している。これら3つの地域は概念的には同心円状に存在し、それぞれ地域A(中心)、地域B(周辺)、地域C(辺縁)と呼び、一つの銭貨流通圏を形成していると考えられる。

東ユーラシアにおいては、上記中国本土を中心とする流通圏のほかに、中国から銭貨を「渡来銭」として受容し、独自の貨幣流通圏を形成した地域がある。それが日本本土、ベトナム、インドネシアなどである。これらの地域はそれぞれ個別に銭貨を受容しているものの、「銅の小平銭のみ」を受け入れるという点で、共通するメカニズムが働いている。これらの地域にも同心円状に流通圏が形成されており、中心を地域a、周辺を地域b、辺縁を地域cと呼ぶ。

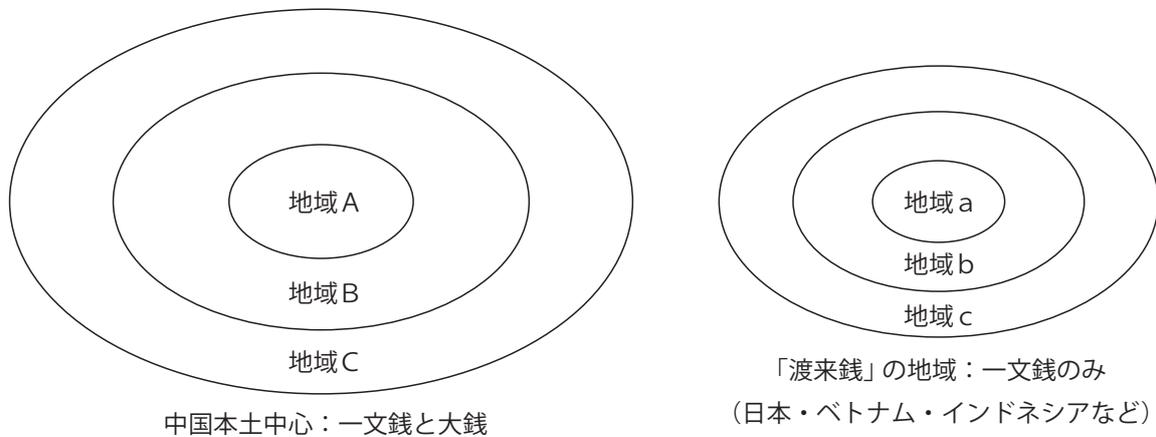


図1 東ユーラシアの銭貨流通モデル

表1 地域区分ごとの考古資料の要素と用途

用途	経済的用途(決済手段)			経済外的用途(決済手段ではない)		
	一括出土銭	都市・土城	住居	副葬品	厭勝銭	装飾品
地域A(a)	○	○	○	○	○	○
地域B(b)	×	○	○	○	○	○
地域C(c)	×	×	△	○	○	○

○普遍的に見られる △発見されることがあるが多くない ×ない

この「地域A-地域B-地域C」と「地域a-地域b-地域c」は基本的に独立しており、個別の系を形成して銭貨が流通していた。しかし、近接する地域の場合は両者が重複し、「地域A-地域B-地域C」と「地域a-地域b-地域c」のどちらからも影響を受ける状況が現れる。たとえば北海道やサハリンなどは、中国と日本本土の両方から銭貨が流入する状況が確認できた(三宅2018)。

このモデル化の有用性は、遺跡から出土する銭貨をどのような来歴で理解すべきか、という問題について一定の解を提示できる点である。中国や日本本土は独自の銭貨流通圏を形成している地域A(a)のためあまり問題はない。しかしモンゴルや沿海州など一括出土銭はないが多量の銭貨が出土する地域や、北海道のように日本本土の銭貨流通圏に属する渡島半島から、大きな集落で一定量の銭貨が出土する遺跡、1~数枚発見されるのみのチャシや送り場などまで多様な出土状況を示し、なおかつ小平銭と大銭両方が見つかるような地域では、その銭貨の来歴の検討が不可欠となる。

またその地域が地域A(a)、地域B(b)、地域C(c)のどこに属するかについては、遺跡の性格や出土状況から検討する必要がある。表1に示すとおり、地域A(a)から地域C(c)へと、項目を減じていく様相を呈することが一般的である。遺跡の状況により、これらの項目すべてが該当するとは限らないが、おおよその目安として、地域A(a)は一括出土銭がある最も銭貨流通の盛んな地域、地域B(b)は一括出土銭はないが相当量の銭貨が発見される地域、地域C(c)は1~数枚しか発見されず貨幣としての機能は希薄となり装飾品など経済外的使用が目立つ地域ととらえることができよう。

次節以降で沖縄の出土銭を検討する必要から、ここで地域B(b)の特徴について、さらに詳細にみておきたい。地域B(b)は、一括出土銭はないが銭貨が相当量発見される地域である。この地域は都市や土城では盛んに銭貨が使用される。しかし自立した銭貨流通圏は形成されず、銭貨の供給は隣接する地域A(a)から受けている。そして同時に、銭貨を使って決済する商品も地域A(a)からもたらされる。そのため地域B(b)において商品購入に使用した銭貨は、地域A(a)に還流していく構造になっている。つまりさかんに銭貨は使用されるものの、それは地域A(a)からの商品に対する決済が目的のため、地域B(b)内での銭貨の需要は少なく、一括出土銭のように地中に埋めてまで大量の銭貨を保持する動機が乏しいと考えられる。

また地域B(b)は、都市や土城の外側には遊牧や狩猟採集を生業とする人々が住む空間が広がっていたと考えられる。それらの人々は普段の生活においては銭貨を必要としない。しかし布や茶など、生活に必要な商品を購入する必要が定期的に生じていたであろう。その際には換金可能な生産物(家畜や毛皮など)を都市や土城に持ち込み市場で換金し、目的の物資を購入したであろう。つまり地域B(b)の人々は、都市や土城だけでなくその外側に住む人々も銭貨を使用するが、集落に大量に銭貨を持ち帰ったりはせず、必要に応じて生産物を換金し、求める商品を購入するために使用したと考えられる。

以上の地域B(b)の特徴は、筆者が調査に携わったモンゴルやロシアの沿海州などの地域を想定して導き出したものである。しかし、この概念は東ユーラシアにおける銭貨流通のモデルとして、多くの地域に適用可能なものと考えている。次節では沖縄の出土銭について、この流通モデルの中へ位置づけることが可能かどうか近接地域との関連を検討してみたい。

2) 東ユーラシアにおける沖縄の出土銭の位置づけ

ここでは第2章で抽出した沖縄の出土銭の特徴を、近接地域との関連を検討することで、東ユーラシアの銭貨の動きの中に位置づけてみたい。これにより、沖縄の出土銭を流通モデルへと組み込む準備が整う。

① 大銭

大銭が一定量存在する点が、日本本土との比較において沖縄の大きな特徴となっている。これは日本本土では大銭が流通していなかったためである。しかし大銭が流通していた中国からみると、大銭の存在は当然と言えるであろう。この点から、沖縄は中国の銭貨流通からの影響を受けていたと考えて良い。その点において沖縄は、小畑弘己が唱え（小畑1997）、宮城弘樹もその可能性を肯定する（宮城2017）、「中国を中心にした環東アジア貿易圏のうちにあり、その内部貨幣としての銭貨流通システムに取り込まれていた」（小畑1997）という視点は当時の沖縄の状況をよく表していると言えよう。

しかしながら、中国とまったく同様という訳ではなく、その出現率の違いが見られる点は、注意しておきたい。中国の事例では14~16%程度の割合であったが、沖縄では5%程度であり、10%ほど低い。これは中国の影響だけでなく、小平銭のみが流通する日本本土からの影響を受けた結果、相対的に割合が低下したものと考えられる。つまり沖縄は、日本本土の「銭貨流通システム」にも取り込まれていたのである。

② 明銭

宮城弘樹の集計では、明銭は洪武通寶1,110枚（折二、折三含む）、永楽通寶569枚が突出して多く、そのほかは4枚（宣徳通寶2枚、嘉靖通寶1枚、萬曆通寶1枚）に過ぎない（宮城2008a）。従って、ここでの議論は洪武通寶と永楽通寶の2種類の銭貨に絞って進めていく。同じ明初に作られた洪武通寶と永楽通寶であるが、沖縄への流入の背景は大きく異なる。

まず洪武通寶であるが、この銭貨は明を建国した洪武帝の洪武元（1368）年に鑄造が開始された銭貨であり、建国初期は銭貨による貨幣経済を導入し、大量に鑄造されている。同時に洪武帝は周辺諸国に來貢を促し、冊封体制の構築を目指す。周知の通り、琉球はこの求めに応じ、中山をはじめ北山、南山の按司たちが使節を派遣して入貢し、朝貢関係を構築している。こうした明との直接的な外交関係の樹立が、洪武通寶が沖縄へ流入する契機となったと考えられる。

ところで中国本土における洪武通寶の流通状況はどうだったのであろうか。明は朱元璋が現在の南京に都を定めて建国した。そのため、明建国後に鑄造した銭貨も華中から華南の地域に早く浸透したと考えられる。このことは、一括出土銭の分布からも裏付けられる。洪武通寶を最新銭とする明初の一括出土銭は筆者の集計では14例あるが、すべて華中から華南地域に分布している。その内2例では「ほとんどが洪武通寶」、「4割が洪武通寶」と報告されており、この地域で非常に多くの洪武通寶が流通していた状況がうかがわれる（三宅2005）。

こうした状況の中、琉球の使節は福建の泉州に入港し、朝貢貿易を開始したのであり、そこで入手する銭貨に多くの洪武通寶が含まれた可能性は高いと言えよう。また先に示した一括出土銭は、銭貨を埋める契機として洪武27（1394）年の銅銭の使用禁止令が関係していると思われる。この禁止令により所持を禁じられた銭貨を秘匿するため、地中に埋めたもの（その後回収できなかったもの）が一括出土銭となったと考えられる（三宅2005）。そして禁止令は、国内で使用不能となった銭貨が、依然として流通している国外へと流出する契機ともなる。もし福建など華南の人々が銭貨を持ち出そうとするなら、最も近いのは琉球である。

実際に沖縄と福建の関係は密接である。明との冊封関係が樹立されると、琉球使節の入港地は福建の泉州に定められ、定期的な往來が開始される。使節団のうち明の皇帝に朝貢する使節以外は、この泉州において待機し、市舶司を通じて貿易を行った。また琉球の外交・貿易活動を支える集団として、福建人が那覇に集住した。いわゆる「閩人三十六姓」である。こうした福建との密接な関係は、銭貨流通に

においても福建との関係を深めたであろう。先に見た通り、華南地域では洪武通寶が多く流通しており、この洪武通寶が福建との強い結びつきの中で、沖縄へもたらされたと考えられる。

以上をまとめると、洪武通寶は明の銅銭禁止令や、華中・華南での洪武通寶の流通量の多さなど、中国の銭貨流通の影響を受けていると見られる。またそれは、福建との密接な関係など地域的なつながり通じて、沖縄に波及したのであろう。洪武通寶の多さは、このような歴史的背景によって説明できると考えられる。

一方、永楽通寶は明朝との朝貢貿易および日本本土との国際交易の中で検討すべき銭貨である。実は中国では永楽通寶はほとんど発見されない。筆者の集成では明の一括出土銭に永楽通寶が含まれる事例はほぼなく^{註6)}、中国において永楽通寶はほとんど流通していなかったと見られる(三宅2007)。しかしその一方、永楽通寶は中国以外の地域では非常に多く発見されている。たとえば日本本土では一括出土銭の中から大量に発見されており、鈴木公雄の集成によれば約21万枚、全銭種中6位の多さである(鈴木1999)。またベトナムやインドネシアでも一括出土銭から多くの永楽通寶が発見されている(菊池・鈴木編2008、2012、三宅2014)。このことから、中国以外の東ユーラシア地域では、永楽通寶は広く流通していたと考えて良い。

永楽通寶が中国以外で流通していたことについては、文献史の研究でも早くから注目されている。曾我部静雄は永楽通寶と宣徳通寶について、外国との貿易の決済に用いるために鑄造されたとし、「明朝の貿易貨幣」であるとした(曾我部1953)。また東野治之も「日本向けの輸出品という性格をいやおうなく備えざるをえなかった」と説く(東野1999)。「貿易貨幣」や「日本向けの輸出品」など、中国国内での流通より国外への輸出を視野に入れていたとする視点は、考古資料の状況と整合的である^{註7)}。

また中国で鑄造された永楽通寶が日本で大量に発見されるということは、これらがもたらされる「輸入ルート」が存在したことを示す。基本的には日明貿易を中心とする直接の交易が考えられるが、橋本雄は15世紀前半の琉球の国際的位置を検討し、琉球が当時の中国から日本への“銭の道”であったと説く。橋本は冊封一朝貢関係に位置づけられる日明貿易は必ずしも順調ではない一方で、唐物・倭物流通のバイパスルートとして琉球王国が中継貿易を行ったと指摘している。そして日本本土の銅銭需要の高まりから、「15世紀前半の古琉球は、中国と日本を結ぶ“銭の道”」として機能したと説く(橋本1998、傍点著者)。つまり琉球は、永楽通寶が鑄造された15世紀前半に明から朝貢貿易を通じて銭貨を輸入し、それを日本へと運んだのである。

この中国と日本本土を結ぶ中継貿易を通じて、永楽通寶の一部が琉球で陸揚げされ、琉球独自の交易に使用された可能性は十分に考えられる。沖縄において永楽通寶が多く発見される歴史的背景は、以上のような状況であったと言えよう。

10 ③ 無文銭

無文銭に関しては第2章で詳細に検討したので、ここでは要点のみ簡単にふれておきたい。

無文銭は九州で多く出土しており、この地域における「地域通貨」として機能していたと考えられる。そしてその銭貨が九州との地域的なつながりの中で沖縄に流入した。宮城弘樹によれば沖縄における無文銭流通は「15世紀から16世紀頃に登場」したという(宮城2008b)。

銭貨を無文に作るという習慣は、日本独自のものとして見て良い。日本以外の地域で作られる私鑄銭(模鑄銭)は、基本的に銘文が入っているからである。このことは東ユーラシア各地においては、私鑄であっても「銭貨には文字が必要」と広く認識されていたことを示している。この点からみても、沖縄で出土する無文銭のルーツは日本本土(特に九州)にあると考えられる。

以上の点から、無文銭は日本本土との影響関係の中に位置づけられる銭貨と言えよう。

なお、無文銭は薩摩が侵攻した17世紀以降、琉球王府の法定通貨と定められ、無文銭流通圏として独自の流通圏を形成する。そのルーツも、九州の地域通貨であった無文銭が、15世紀以降にすでに流通していたことが背景となっている。その点からも無文銭は日本本土の銭貨流通の影響を示すものである。

3) モデル化の試み

この第3節では沖縄の出土銭を、東ユーラシアにおける銭貨流通モデルに当てはめてみたい。なお、この銭貨流通モデルは国家の領域や経済政策を反映したものではないことを申し添えておく。もちろんそれらの影響は受けるものの、銭貨の「うごき」は国や地域を越えたダイナミックなものであり、基本的に民間における銭貨流通の「メカニズム」を元に形成される。

そのため銭貨が独自の流通圏を形作るには、その中で「信用」が重要となる。つまり取引の際に、次回以降もこの銭貨が「受け取られる」信用があって初めて決済が成立する。こうした民間のメカニズムが、中国を中心とする小平銭と大銭が流通する「地域A - 地域B - 地域C」と小平銭のみが流通する「地域a - 地域b - 地域c」を作り上げたのである。

では沖縄において、独自の銭貨流通圏は形成されたのであろうか。現時点で筆者は、形成されなかったと考えている。大きな理由として、「一括出土銭がない」ということがあげられる。地域A (a) の要件(表1)である一括出土銭がないことは、沖縄に独自の流通圏を設定することが難しいことを示している。流通している銭貨を地中に大量に埋める行為は、それを備蓄して未来のどこかの時点で再び利用する意図があることを示している^{註8)}。そうした行為は、銭貨を埋めても影響がないほど流通圏内に十分に銭貨が流通しており、またその流通圏内で銭貨による決済が必要な商品が十分に存在する必要がある。

これを逆の視点で述べれば、流通している銭貨の量が十分ではなく、地域を越えた商品に対して銭貨を使った方が地域内の商品決済に使用するより有効な使い道だと認識されていた場合、地中に銭貨を埋める動機が生まれないのである。こうした沖縄の状況を宮城弘樹は「価値貯蔵の手段としては、未だ多くの人々にとって魅力のないものとして認識されていたため」としている(宮城2008b)。つまり、「貯める」より「使う」方に魅力があったと言えるであろう。

そして、地域を越えた決済手段として銭貨を使用することに重点が置かれている点は、流通モデルの地域B (b) の特徴に適合していると見ることができる。以下に「地域を越えた決済」と「銭貨の流通量」の2点を中心に、沖縄の出土銭の状況を分析してみたい。

沖縄では11~16世紀に属する出土銭は沖縄本島に集中しており、中でも那覇市域(首里・那覇)が突出して多いという。このことを宮城は「経済の一大中心地であったと考えられる王都首里や港湾都市那覇においては銅銭が頻繁に用いられ、広く流通していた実態を示している」ととらえている(宮城2008b)。国際交易を担っていた那覇と外交使節との交渉が行われる王都において、多くの銭貨が用いられていたことが分かる。この場所で用いられる銭貨は、多くは国際交易品などの決済や使節の滞在時の費用として使われたと見る方が自然であろう。つまり出土銭が集中する場所では「地域を越えた決済」に重点が置かれていたと考えられる。

また沖縄においては、出土銭はグスクなどの拠点に集中する傾向があり、その周囲の集落などでは出土例が減少する。宮城弘樹の分析では、今帰仁城跡および周辺遺跡から総計1,499枚の銭貨が出土しているが、城内の中枢部と考えられる主郭(按司層が居住)で1,381枚が出土、志慶真門郭(家臣団)が82枚、城下集落の今帰仁ムラ跡で36枚出土しており、城内での出土が圧倒的に多い。また同時代の一

一般集落と考えられる天底後原遺跡では(寛永通寶も含め)4枚、古宇利原A遺跡では北宋・明銭3枚が出土しているという(宮城2008b)。つまり、拠点以外では「銭貨の流通量」は少なかったのである。

沖縄本島がこのような出土状況を示すことについて、宮城は「階層上位の人間がより多く銭を使用、もしくは銭に接する機会があり、階層下位の人間はこれが少なかったことを示す」ものとする。しかし一方で、一般集落からも少量ながら出土することは「沖縄本島では一般集落の民衆も含め銭に接する機会があった」とし、「銭が商品交換の媒体として広く人々に認知されていた」と考えている(宮城2008b)。

こうした状況は、銭貨流通モデルの地域B(b)の特徴と一致する。すなわち都市や土城の人々は恒常的に銭貨を使用しているが、その外側に住む人々は普段の生活においては銭貨を必要としないものの、生活に必要な商品を購入する必要がある定期的に生じているような状況である。

また同時に宮城は、離島などの地域には出土銭が少ないことに言及し、これは「琉球の域内においても、銅銭の交換財としての地位獲得には温度差があった」ためと考えている(宮城2008b)。つまり決済手段としての銭貨の使用は沖縄本島が中心であり、離島などでは必ずしも浸透していなかったと考えられる。さらに出土銭の中には意図的に孔が穿たれたものがあり、装飾品として利用されたものが存在する。宮城はこうした事例の出現頻度は宮古・八重山地域の方が相対的に高いことを指摘している(宮城2017)。経済外的利用の比率が相対的に高まるという、この離島の状況は、銭貨流通モデルでは地域C(c)と整合的である。

なお台湾ではこの時期に属する遺跡として十三行遺跡や淇武蘭遺跡などから銭貨が出土しているが、報告者によれば、それらにも穿孔が見られたり装飾として用いられたりしたものが多いといい、貨幣としての機能はほとんど持たなかったようである(臧・劉2001、宜蘭縣立蘭陽博物館2008)。さらに台湾で出土する銭貨の中に「洪武通寶はあるが永楽通寶は見られない」という点は注目すべきであろう。前節で検討した通り、永楽通寶は中国ではほとんど流通していないにも関わらず、沖縄では大量に発見されているからである。その永楽通寶が台湾にないということは、台湾の銭貨は中国本土から流入したものであり、沖縄からは来なかったことを示している。これらの状況を勘案すると、台湾は中国本土を中心とする銭貨流通圏の辺縁、すなわち「地域C」に属していると見て良いだろう。

以上、沖縄の出土銭の状況を分析し、銭貨流通モデルの中へ位置づける試みを行った。その結果をまとめると次のようになるだろう。沖縄本島は多くの銭貨が流通しているが一括出土銭が存在せず、独自の銭貨流通圏を形成しているとは考えにくい。またグスクなど拠点を外れると銭貨の流通量は減少するため一般集落では日常的に銭貨を使用していなかったと考えられる。さらに出土する銭貨の種類からは、中国と日本本土の両者から銭貨流通の影響を受けていることが見てとれる。こうした状況から、沖縄本島は中国の流通圏「地域B」であると同時に、日本本土の流通圏「地域b」でもあったことが分かる。

12 そして離島などでは銭貨の決済手段としての機能が弱まっていることから「地域C」であり「地域c」でもあったと考えられる。併せて台湾の状況を分析すると、中国の影響は見られるが沖縄からの影響はないことから、「地域C」にのみ属していると見ることができよう。

以上の状況をまとめると、図2のような概念図を描くことができるだろう。沖縄においては、中国と日本本土の銭貨流通の影響が重なり合い、重層的な銭貨流通の様相を呈していることが分かる。そしてこの分析を通して、筆者の考える銭貨流通モデルが、この地域においても有効に機能することが確認できたと言えよう。

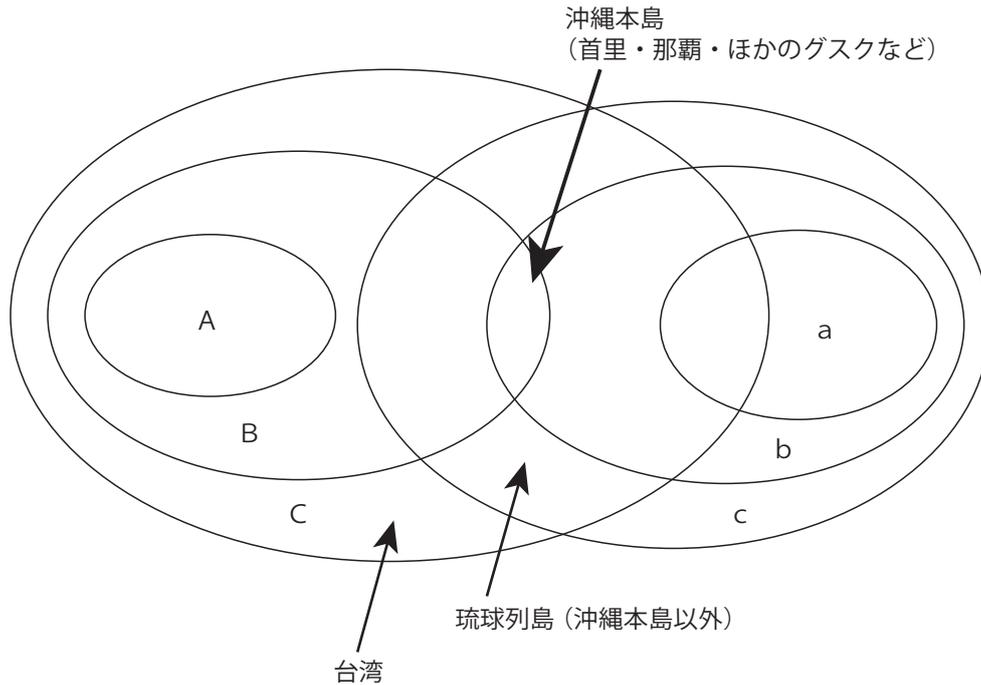


図2 沖縄の銭貨流通モデル

おわりに

本論では、沖縄における出土銭について、11～16世紀を中心に検討を加えた。その結果、沖縄で流通した銭貨は中国と日本本土の両者から影響を受けていた状況が明らかとなった。また筆者が構築を試みている銭貨流通モデルに位置づける試みを行い、沖縄本島では独自の銭貨流通圏は形成されず、中国の「地域B」と日本本土の「地域b」の両者に属するととらえることで、流通モデルの中に位置づけることが可能であり、同時にモデルの有効性も確認できた。

なお、当時の琉球において独自の銭貨流通圏が形成されなかったことは、琉球の自律性を否定するものではない。むしろ銭貨を対外的な決済手段あるいは交易品とみなし、中国や日本本土との国際交易の中で有効に利用した結果とみるべきである。それは中国・日本本土はもちろんのこと、東南アジア諸国や朝鮮とも交易を進めた「万国の津梁」としての琉球王国の独自性を体現しているものと言えるであろう。

東ユーラシアにおける出土銭貨の研究は、未だ盛んとは言いがたい。本論が東ユーラシアの貨幣考古学確立の一助となれば幸いである。

付記

本論は、科研費JSPS16H03512（研究代表者：三宅俊彦）および平成28年度平和中島財団アジア地域重点学術研究助成（研究代表者：後藤雅彦）の助成を受けた研究成果の一部である。

註

- 1) 本論であつかう「東ユーラシア」は、北東アジアから東アジア、東南アジアに至る広い地域を指す。それは「中国銭が流通・使用され、普遍的に遺物として発見される地域」と言えよう。範囲の設定とその考え方は、拙稿（三宅2018）を参照されたい。

- 2) 以下、第1章では特に断らない限り、宮城 2008b の研究成果を参照している。
- 3) 鈴木は 1,000 枚以上一括して出土する銭貨を「備蓄銭」と呼び、集成をおこなっている。筆者はこのような事例を「一括出土銭」と呼んでおり、本論ではこの呼称に統一する。沖縄ではこれまで一括出土銭の事例はないため、鈴木は集成は北海道から九州までの「日本本土」の事例として、沖縄の出土銭と比較することが可能である。
- 4) 2008 年 1 月 18 日に沖縄県立埋蔵文化財センターにて行われた、沖縄考古学会定例研究会において宮城弘樹が「琉球出土銭貨の研究」と題する研究発表を行っている。その配付資料に「表7 琉球出土銭貨種類集計」があり、近世までの出土銭貨 11,326 枚の種類と枚数が記されている(宮城 2008a)。なお宮城 2008b の論文では総計が 14,042 枚あり、さらに事例の収集が進展しているが、銭貨の種類ごとの集計ではないため大銭の枚数が分からない。そのためここでは研究発表の配布資料に基づいて議論を進める。
- 5) 小畑弘己による集成は 1997 年時点のものであり、情報がやや古いことに注意が必要である。小畑によればこの時点での沖縄発見の大銭の割合は 1.13% であり、本論で参照している宮城弘樹の 2008 年時点の集成では 5.1% と大きく異なっている。しかし、博多に比べて沖縄の方が大銭の出現比率が高い点は変わらない。
- 6) 永楽通寶を最新銭とする事例に、福建省の木材検査站の一括出土銭がある。しかしこの事例は複数回報告されており、最新銭については洪武通寶の場合と永楽通寶の場合があるため、どれが正確なのか分からない。しかし筆者が集成した明の一括出土銭 27 例のうち永楽通寶を最新銭として報告しているのはこの事例のみである。明の一括出土銭の傾向として、明初に洪武通寶を最新銭とする事例が集中(14 例、木材検査站の最新銭が洪武通寶なら 15 例)したのち、一括出土銭は 200 年以上作られず、明末に再び 12 例が集中する。そして明末の事例では最後の皇帝である崇禎帝の時期に発行された崇禎通寶や、地方政権が独自に発行した銭貨などが主体であり、明初の銭貨やそれ以前の宋銭などはかなり少ないと考えられる(永楽通寶は 1 例(1 枚)のみ報告されている)。そのため、本論では中国においては永楽通寶がほとんど流通していないと考え、論を進めていく。
- 7) これについて黒田明伸は、永楽通寶は中国国内で流通していたのであり「日本など海外への下賜のために鑄造したなどということの意味しない」とする。また黒田は日本から発見される永楽通寶は日本で鑄造されたと考えている(黒田 2007)。筆者は、永楽通寶発行の意図についての見解は特にないが、中国国内ではほとんど発見されず周辺地域で大量に発見されるという考古資料の状況は、中国から輸出されたとする見解と整合的であることから、こちらの考えを支持しておきたい。また永楽通寶が日本国内で鑄造されたとする見解については、一部の永楽通寶が国内で模鑄されたのは確かであるが、大多数の永楽通寶は中国で作られたと考えている。永楽通寶は小平銭のみ作られた大変規格の整った銭貨であり、日本の低品位の模鑄銭と判別は可能である。その視点で見ると日本国内はもちろん、ベトナムやインドネシアで発見される永楽通寶もその様相はまったく同様であり、中国で規格に則って鑄造されたものが東ユーラシア各地へ流出したとする方が、現状をよりよく説明できると考えている。
- 8) 日本では大量の銭貨が埋められる理由として、「備蓄」と「埋納」の 2 説が対立しており、結論が出ていない。しかし中国の事例を見る限り、大量の銭貨を埋める行為は戦乱などの社会不安や銅銭の使用禁止令などを原因としていることは明らかである(三宅 2005)。そのため、本論では「埋納」説ではなく、「備蓄」説(緊急避難や秘匿も含む)に則って論を進める。

参考文献

【日文】

- 阿部百里子 2013「ベトナムにおける一括出土銭の最新研究」『日本考古学協会第79回総会研究発表要旨』日本考古学協会 p.148～149
- 小田静夫 2007「琉球弧の考古学—南西陸橋におけるヒト・モノの交流史—」丸井雅子監修・青柳洋治先生退職記念論文集編集委員会編『青柳洋治先生退職記念論文集 地域の多様性と考古学—東南アジアとその周辺—』雄山閣 p.37～62
- 小畑弘己 1997「出土銭貨にみる中世九州・沖縄の銭貨流通」熊本大学文学会『文学部論叢』第57号史学篇 p.75～99
- 小畑弘己 2003「出土銭貨からみた琉球列島と交易」木下尚子編『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—改訂版』熊本大学文学部木下研究室 p.145～162
- 小畑弘己・西山絵里子 2007「中世博多における出土銭貨と流通」『市史研究ふくおか』第2号、福岡市博物館市史編さん室 p.17～32
- 菊池誠一・鈴木弘三編 2008『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.12
- 菊池誠一・鈴木弘三編 2012『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究2』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.16
- 木下尚子 2000a「開元通宝と夜光貝—7～9世紀の琉・中交易試論—」『高宮廣衛先生古希記念論集 琉球・東アジアの人と文化』(上巻)高宮廣衛先生古希記念論集刊行会 p.187～219
- 木下尚子 2000b「銭貨からみた琉球列島の交流史」『古代文化』Vol.52-3, p.57～65
- 黒田明伸 2007「東アジア貨幣史の中の中世後期日本」鈴木公雄編『貨幣の地域史 中世から近世へ』岩波書店 p.9～42
- 櫻木晋一 2013「5号資料3) 銭種組成」菊池誠一・鈴木弘三編『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究2』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.16 p.48
- 櫻木晋一・大庭康時・三宅俊彦・中竹俊博 2013「五ヶ瀬町坂本城跡—一括出土銭の再調査—宮崎県総合博物館所蔵資料—」『宮崎県総合博物館研究紀要』第33輯 p.111～139
- 嶋谷和彦 2001「堺の模鑄銭と成分分析」東北中世考古学会編『中世の出土模鑄銭 東北中世考古学叢書1』高志書院 p.138～160
- 鈴木公雄 1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 曾我部静雄 1953「明銭の渡来」『社会経済史学』Vol.19 No. 1 p.50～62
- 高宮廣衛 1995「開元通宝から見た先史終末期の沖縄」大川清博士古希記念会編『王朝の考古学』雄山閣 p.267～286
- 東野治之 1999『貨幣の日本史 朝日選書 574』朝日新聞社
- 中島圭一 1992「西と東の永楽銭」石井進編『中世の村と流通』吉川弘文館 p.144～172
- 長濱健起 2019「第IV章第9節 銭貨と経済」沖縄考古学会編『南島考古学入門—掘り出された沖縄の歴史・文化』ポーターインク p.160～163
- 永原慶二 1997「伊勢商人と永楽銭基準通貨圏」『戦国期の政治経済構造』岩波書店 p.204～225
- 橋本雄 1998「撰銭令と列島内外の銭貨流通—“銭の道”古琉球を位置づける試み—」『出土銭貨』第9号 p.87～111
- 東恩納寛惇 1979「南島通貨史の研究」琉球新報社編『東恩納寛惇全集4』第一書房 p.1～147
- 宮城弘樹 2008a「琉球出土銭貨の研究」2008年1月18日(金)沖縄考古学会定例研究会(沖縄県立埋蔵文化財センター)配布資料
- 宮城弘樹 2008b「琉球出土銭貨の研究」『出土銭貨』第28号 p.3～45

- 宮城弘樹 2017「琉球列島における貨幣認識と貨幣利用の多様性」『南島考古』第36号 p.281～290
- 三宅俊彦 2005『中国の埋められた錢貨 世界の考古学⑫』同成社
- 三宅俊彦 2007「中国における永楽通寶の出土事例」『出土錢貨』第26号 p.102～114
- 三宅俊彦 2008「3.3号資料3) 錢種組成」菊池誠一・鈴木弘三編『ベトナム北部の一括出土錢の調査研究』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.12 p.126～127
- 三宅俊彦・アレクサンデル=L. イーヴリエフ 2008「北東アジアの錢貨流通—金代を中心に—」菊池俊彦・中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ』高志書院 p.197～222
- 三宅俊彦 2013「サハリン出土の錢貨」『環オホーツク海地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究』北海道大学総合博物館研究報告第6号 p.66～85
- 三宅俊彦 2014「インドネシアの出土錢調査」『東南アジアにおける出土錢貨の考古学的研究 2014年度研究会(予稿集)』淑徳大学人文学部歴史学科 p.17～22
- 三宅俊彦 2017「東アジアの出土錢貨」後藤雅彦編『平成28年度平和中島財団アジア地域重点学術研究助成成果報告書 台湾の鉄器時代文化と琉球列島の比較考古学』琉球大学法文学部 p.53～59
- 三宅俊彦 2018「10 - 15世紀東ユーラシアにおける錢貨流通」『東洋史研究』第77巻第2号 p.1～40
- 宮澤知之 2007『中国銅錢の世界—錢貨から經濟史へ— 佛教大学鷹陵文化叢書16』思文閣出版
- 山里純一 1999「第二章 南島出土の開元通寶」『古代日本と南島の交流』吉川弘文館 p.137～148
- 【中文】**
- 陳琿 1988「杭州中河治理工程発現的宋代窖藏銅錢清理報告」『中国錢幣』1988年第2期 p.61～68
- 馬林 1994「河北省順平県発現金代窖藏錢幣」『文物春秋』1994年第4期 p.26～27
- 宜蘭縣立蘭陽博物館 2008『淇武蘭遺跡搶救發掘報告5』宜蘭縣政府文化局
- 臧振華・劉益昌 2001『十三行遺跡：搶救與初步研究』台北縣政府文化局

図表出典一覧

- 図1 三宅2018図6を引用。
- 図2 三宅2017図4を引用。
- 表1 三宅2018表1を改変。